



「花台」工芸
前原 隆二さん(備中町布賀)



「五月人形」切り絵
西本 ヒデコさん(高倉町田井)



「信州大町にて」油絵
江草 昌平さん(落合町阿部)



「花菖蒲」切り絵
鈴江 鶴子さん(高倉町田井)

ミニ★ピククス

ササユリはユリ科の多年草でササに似た葉が特徴。中部地方以西に自生するが、山の荒廃により近年急速に減少している。
写真は同所の亀石辰巳さん(P23で紹介)の所有地で、標高350mの北向き斜面に約150本が群生。高さ1m前後の茎の先に1〜5個の花が咲き、中には1本の茎から7個咲いているものもある。

ササユリ(川上町仁賀 中筋地区)



「花のリース」手芸
村上 榮さん(有漢町上有漢)

作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など
 - 【作品】絵画、工芸品、町の風景写真など
 - 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
 - ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。
(撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
 - 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り 掲載号の前月の末日(必着)

- 問い合わせ・送り先
〒716-8501(住所不要)
高梁市役所企画課公聴広報係 ☎0210
Eメール:kikaku@city.takahashi.okayama.jp
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※提供いただいた写真等は返却できません。

市民へ

文芸たかはし

(敬称略)

短歌

幾十日留守して帰れば花だんの花ほほ笑みて迎えてくれる

赤木 文子 (備中町西山)

穴空いてボロボロなれど捨てられぬ青春の匂いマイ・リーバイス

井上 明彦 (備中町平川)

鈴蘭の清楚な花は下を向く君影草と誰が名付けたか

梅野 八郎 (松山)

逝きませる義弟の臥せし枕辺の手彫りし亀の群れの悲しき

小野はる恵 (原田南町)

空蟬の如き我が身を励まして夫の愛でいし花に水やる

梶谷 文江 (石火矢町)

サクサクと歯ざわり楽しむ一夜漬け一人笑みつつ朝の食卓

亀石恵美子 (川上町仁賀)

山郷でゴールデンウィーク代掻きや田植え多忙な日猫の手借りたい

下向 近雄 (備中町平川)

裏山を梅雨の晴れ間にけたまし「弟来たか」と兄はとぎす

田中 弘子 (川上町領家)

夫三回忌足の歩めるその日までお父さんの好きなお酒供えて

戸田奈美子 (川上町地頭)

人去りて春たけなわの山里に静けさもどり樹々は芽生えぬ

榊上 秀雄 (備中町西山)

青空に高くおよげる鯉のぼりひ孫の幸せ祈りながら

森崎 道子 (宇治町宇治)

俳句

菊の苗しかと根付きて春めけり 平松 幾代 (長寿園内)

ケンケンと雉子とび立て足とめる 結城 成子 (宇治町宇治)

川柳

葉付みかん届いて故郷の学友元氣 中島 清市 (成羽町吹屋出身)

睦み合うグラウンドゴルフ勝負ない 藤井タツ子 (備中町西山)

よみがえるしずかに舞うやイナバウアー 横田 早苗 (備中町西山)

良い夢はいつも途中で目がさめる 吉岡 麻江 (鶴寿荘内)

地名をよるし

二十 巨瀬



「巨瀬」は現在の高梁市巨瀬町で、高梁川の支流、有漢川の中流域にあつて、有漢川に沿つた小規模の河成段丘面と吉備高原を開折する多短谷が枝状に見られる小起伏の高原地域とでなつています。

「巨瀬」は平安時代の「和名類聚抄」に「賀夜郡巨勢郷」として書かれています。

中世になって、いろいろな史料に「巨瀬」の地名が見えています。

中世は巨勢荘という荘園でした。東鑑(吾妻鏡)寛喜三年(一一三二)六月二二日の条に「高野法印貞暁の遺領備中国多氣荘(竹荘付近)、巨勢荘を西園寺実氏の子道勝に譲る」と史料にあり

ます。後の建治二年(一二七六)には「寂印書状」(前掲書)に「巨勢荘が幕府より仁和寺に返還された」という記録があつて、室町時代に巨勢荘は、仁和寺門跡の領だつたことが分かるのです。後になると仁和寺領から相国寺領、そして応永一四年(一四〇七)長講堂御影堂(開山堂)領、年貢米は二〇石となつていました。また矢掛の洞松寺領時代もあつた(「日本荘園史大辞典」)のです。

南北朝時代の中頃には祇園寺も有名だつたらしく、延文二年(一三五七)五月四日の年紀のある毘沙門天像右足柄銘に「備中国巨勢庄祇園寺二天第三度修理」(岡山県古文書集)と書かれた記録も残っています。

また「吉備津宮惣解文」(前掲書)に「備中国上方郡巨勢郷狩人二百人矢作親真」とあつて、矢作親真が狩人二〇〇人を吉備津宮に献じたことが書かれ、吉備津宮がこの地の管理にかかわつていたことが分かるのです。

安土桃山時代には「備中兵乱記」(吉備群書集成)に「古瀬」と表記しています。

江戸時代になると「正保郷帳」(一六四五〜一六四

六頃)に八か村を上げ、各村ごとに石高が記録されています。幕末の「天保郷帳」(一八三四頃)では、古瀬八川、柳分、片岡、宮瀬、六名の各村の石高が書かれています。

柳分村は八川村の一部と柳分村にあたり、松山藩領で、椿が御留椿(領主の直営林)として指定されました。塩坪には市場が発達し、街村を形成しました。家数一〇軒、人数四九三人(備中誌)とあります。宮瀬村は片岡村の西、和名谷、園尾などがあり、以前の三吉村・小条村がこの村に当たり祇園村も含まれていました。

祇園山(五五〇m)には祇園寺があつて、本尊は千手観音、現在の本堂は延宝六年(一六七八)水谷勝宗の再建になるもので、境内の延文二年(一三五七)銘の石造宝塔は県指定の重文になっています。

六名村は西方山間部にあつて、松山藩領、家親には聖徳太子開基と伝えられる千住寺があります。

以上の四か村が合併して「巨瀬村」となつて明治八年(一八七五)一八八九)まで続き、上房郡巨瀬村となつて昭和二九年高梁市の町名になっています。

「巨瀬」という地名は岡山県内に美作市「巨勢」、美咲町の「小瀬」などがあります。

①古代豪族の巨勢氏からきた部地名②小狭という地形を意味した地名③川瀬、川迫などの溪谷地形を意味し、古代・中世の地名として好字を地名にあてたもので、西日本に多い地名だという説です。

②と③が最もふさわしい「巨瀬」だと思います。(文・松前俊洋さん)



「巨瀬」遠望